

なかでも、日本の朝鮮遺跡・遺物研究に関してとくに注目すべきは、西川宏の「日本帝国主義下における朝鮮考古学の形成」(『朝鮮史研究会論文集』7集、1970年)である。西川は、日本の「官学アカデミー」が日本帝国主義の朝鮮侵略と共に朝鮮に侵出し、武断政治期までの時期に行った朝鮮遺跡・遺物調査は、純粋に学問的だったとは言いがたく、むしろ朝鮮総督府の植民地政策と密着した形で行われたとした。植民地支配を肯定するような1950～60年代の論考に対し、厳しい批判を下したのである。

1990年代以降、韓国の歴史学界においては、それまで主流とされてきた政治・経済史以外の社会史、文化史、民衆史等へと研究領域が広がり、日本の朝鮮遺跡・遺物研究に関する研究も続々と発表されるようになった。その研究をテーマ別に分類すると、(1)日本の朝鮮文化財搬出に関する研究⁵、(2)博物館を中心にする研究⁶、(3)植民地期文化財の法制史に関する研究⁷、(4)朝鮮総督府の古蹟調査事業に関する研究⁸に分けられる。日本の朝鮮文化財搬出に関する研究は、1960年代以降から現在までなされており、その実態の解明もある程度の成果を見せている。その他の(2)～(4)の研究は、より具体的な植民地期の実状の解明、つまり博物館、制度、古蹟調査等に細分化されつつあるものの、その問題意識は総督府の植民地政策における植民地性を明らかにするところに重点が置かれている。

ただし近年の「植民地的近代」をめぐる韓国歴史学界の研究動向には、植民地期の朝鮮社会を一律に規定するのではなく、様々な分野からのアプローチを通して、既存の「侵略と抵抗」の二項対立的構造を乗り越えようとする意図も含まれている。政治史・経済史から一步を進め、社会や文化などの諸領域まで歴史研究が広まったことは一定の成果だといえるが、文化財史だけに限定して言えば、依然として朝鮮総督府の政策、つまり「侵略」に焦点を合わせた植民地的性格の解明とその強調に止まっているといわざるを得ない。

一方、そうした既存の研究視点と一線を画した研究として注目したいのは、全京秀の「韓国博物館史における表象の政治人類学」(『国立民族学博物館研究報告』24巻2号、1999年)と、李成市の「朝鮮王朝の象徴空間と博物館」(『植民地近代の視座:朝鮮と日本』岩波書店、2004年)、同「コロニアリズムと近代歴史学—植民地統治下の朝鮮史編修と古蹟調査を中心に」(『植民地主義と歴史学—そのまなざしが残したもの』刀水書房、2004年)である。全京秀は朝鮮総督府博物館の植民地的性格を明らかにしたうえで、現在の韓国博物館が持つ民族主義的な性格に対して内省的省察を促しており、植民地期の博物館と現在のそれとを連続線上で分析したことに意義がある。また、李成市は既存研究の盲点ともいえる一国史的観点から離れて、「植民地朝鮮」と「近代日本」の関連性に注目する。植民地期博物館の設立経緯と近代日本の博物館制との関係、総督府の古蹟調査事業と近代の日本歴史学との関係に着目したところは、既存の研究と異なる分析視覚だといえる。だが、全京秀と李成市の論考が植民地博物館と総督府調査事業の植民地的性格の摘出を中心に議論を展開していることは、既存の研究と一脈相通じるところである。

その他、日本の考古学界を中心に、植民地期朝鮮で直接遺跡・遺物の調査研究に当たった研究者個人に目を向けた研究も進んでいる。そこで重点が置かれているのは、彼等の残した日本考古学の科学的、実証的業績であり、朝鮮半島だけでなく、日本を含む東アジア全域を視野に入れた考古学的成果である⁹。

そのような既存の研究を踏まえて考えると、本稿で注目する問題が浮かび上がる。植民地

期朝鮮の遺跡・遺物をめぐる研究動向は、対象の時期が植民地であるがゆえに、その植民地性の解明に問題意識が集中されている。そのため、とくに植民地性が端的に表れやすい制度的な側面が注目を集めているのである。たとえば、朝鮮文化財における植民地法制的性格、博物館の収集・展示における植民地的プロパガンダ、古蹟調査における文化財の略奪と歴史歪曲の実態などといった具合である¹⁰。こうした制度的な側面からのアプローチは、結果的に朝鮮総督府の政策上における植民地性の解明に収斂されていく。

ここでは、上記の植民地的性格の解明を主眼とする研究を否定することではない。既に完備された植民地的制度・施設がどのような政治的色合いを持ち、また時代とともに如何なる変化を遂げていくのかを考察することも重要な視点である。ただし、その制度・施設が、どのような過程をへて整備されるにいたったのかという検証も重要ではなかろうか。要するに、朝鮮文化財に関する制度が政策的に採択されるまえに、どのような人々が、どこでどのような活動を行ったのか、さらに、そこから朝鮮総督府は如何なる事項を取捨選択したのか、といった制度の外側における動向と議論の分析も必要である。植民地期の遺跡・遺物研究から朝鮮人が排除されたことから、その活動や議論の主役は当然日本人になるわけだが、現在の韓国では、これらの当事者である日本人が残した記録には余り目が向けられていないようだ。植民地期朝鮮文化財の歴史を総体的に把握するためにも、様々な分野で朝鮮文化財の調査に着手した日本人の活動記録の分析が必要とされる。

本稿では、既存の研究を踏まえ、1900年代初頭に朝鮮文化財を調査した八木奘三郎に焦点を当てる。植民地朝鮮に創出される「朝鮮文化財」の歴史は、八木の人類学的・考古学的調査から始まったと思うからである。周知の通り、日韓併合後、朝鮮総督府の植民地政策の根幹を成しているのは同化政策であり、植民地期を通しての「朝鮮文化財」、つまり朝鮮の遺跡・遺物に関する調査・研究も、朝鮮総督府の植民地政策の一環として組み入れられていた。ところが、八木の調査した時期は日韓併合の前の時期であり、日本の朝鮮遺跡・遺物研究が植民地政策としてはいまだ組み込まれていない時期である。この時期に行われた日本の朝鮮遺跡・遺物研究はどのような特質を持っているのか、またそこで生まれた「朝鮮文化財」はどのような「像」をもって歩み出したのかを考察する。

八木における朝鮮半島の人類学的・考古学的調査は、その後続く日本人学者による「朝鮮文化財」の調査・研究の方向性と、彼等が創る「朝鮮文化財」のイメージ形成に少なからぬ影響を及ぼしたと思われる。八木の残した論考を通して、併合前の時期に行われた日本の朝鮮遺跡・遺物調査研究の一面を考察し、彼の調査から創り出された文化財としての「韓国の美術」論とは如何なる範疇から成立ち、また如何なる特質を持っているのかを検証するのが本稿の具体的な目的である。

1891年10月、八木奘三郎は親戚関係にあった若林勝邦の勧めにより、東京人類学教室で「標本取扱」の名目で勤め始めた。以来、日本各地において人類学的・考古学的の実地調査を行うと同時に、数多くの関連報告を人類学雑誌に発表した。そして、1898年6月と翌年1月には、明治維新以来「日本学者の手によりて成りたる」日本考古学の最初の著作であり、「考古学史上没す可からざる」ものとして評価される『日本考古学』(上・下)を出版した¹¹。この時点で、八木の名は日本の人類学界・考古学界で広く知られるに至ったのである¹²。

八木は1900年と1901年に2回にわたる韓国調査を実施し、また、1913年からは植民地となった朝鮮の李王職博物館¹³で1917年まで勤務した経歴を持つ¹⁴。その後は、満州に渡り満鉄総裁室広報課に勤めながら、主に満州の人類学・考古学調査に専念する。この時期の調査報告書は時折満鉄広報課から出版されており、東京においても『満州考古学』（初版、1928年）が刊行される。25歳のとき、東京人類学教室とかかわりながら人類学及び考古学に興味を持ち始めた八木は、日本各地の実地調査の経験を経て、48歳から52歳までは植民地朝鮮で、その後は大連で古希を迎えるまで調査活動に専念したのである。

八木奘三郎のもともとの学問的な出自は東京人類学教室を中心とする人類学の調査だったが、のちの評価は主に考古学界を中心に行われた。まだ、人類学と考古学の線引きが曖昧な時代に活動した八木を、今では考古学者として位置づけているのである。東京に戻ってから亡くなるまで、特に親交の厚かった考古学者清野謙次は八木奘三郎について、次のように記している。

「考古学者としての八木氏の業績は草創の学者としてである。日本において最初の日本考古学を著はしたし、台湾に在りし時間こそ短かけれ、朝鮮に於ては総督府博物館設立以前、既に幾多の考古学的土俗学的の研究報告を行って居る。満州考古学1冊はまた満州に於ける初期考古学の著作として永久の価値がある。要するに、日清、日露の両戦役を経て帝国の勢威が是等地方に拡大して、考古学の研究史が伸展すると共に、最初の研究者として現はるるものの中に、必ず八木氏が在った」¹⁵

戦前における八木奘三郎に関しては、坪井九馬三のように「八木奘三郎君は本邦考古学の権威なり」¹⁶と評価を下す場合もあった。その後、清野謙次の言うごとく「日本考古学の先駆者」¹⁷や、陶磁器研究者小山富士夫の言うごとく「我国考古学の先覚者」¹⁸として位置づけられたものの、彼の存在は徐々に世間から忘れ去られていった。そして、1976年の日本考古学選集の刊行に当たり、考古学者齊藤忠による再照射が行なわれるが、そこでも依然として「この学問（考古学）の先駆者として彼の名とその業績は、学史の上で、没却することはできない」¹⁹と戦前の評価を踏襲するにとどまっている。要するに、八木奘三郎の日本考古学界における学問的评价は、彼の残した学問の内容よりも、日本の考古学を開拓した「先駆者」としての側面に重点が置かれているのである。

ともあれ、清野謙次の言うように、八木は日本だけでなく、台湾・朝鮮・満州においても、人類学的・考古学的調査を行なった「最初の研究者」の一人だった。台湾では風土病などの原因で適応できず、1年も満たないうちに帰国してしまったため、調査報告は少ない。一方、満州での調査内容は満鉄の庇護の下に出版され、さらに東京での単行本までも加わり、ある程度研究の足跡を追うことができる。ところが、韓国及びその後の植民地朝鮮の調査内容に関しては、著書も刊行されておらず、その全貌を伺うことが困難である。そこで彼の発表した論文を丹念に分析していくしかないのである。

2、八木奘三郎における韓国調査の背景と目的

東京帝国大学の海外調査という大きな流れの中で、理科大学の人類学教室も人を海外に派遣するようになった。人類学教室は日清戦争の終了後、その占領地である遼東半島を中心に人類学調査を行う方針を定めていたのである。1895年6月30日、人類学教室は中央委員会²⁰を開き、「本会ヨリ人類学上探検ノ為遼東半島へ向ケ会員一名ヲ派遣」することと、鳥居龍蔵を推薦することを決めている²¹。

当時、日本における人類学研究は、東京帝国大学理科大学の人類学教室を中心に推進されており、その中心人物として日本人類学の始祖と呼ばれる坪井正五郎がいた。鳥居龍蔵を占領地の遼東半島へ差し向けたときには、坪井自らが証明書²²を書いて大本営に提出し、遼東半島における調査の便宜を図っている。大本営からの添書を手にした鳥居龍蔵は遼東半島へ渡り、その調査経緯を坪井正五郎に報告した²³。

鳥居龍蔵は遼東半島の調査を終え、翌1896年にはまたもや人類学上取調べのために台湾へ渡っている。日本のアジア大陸侵出に伴い、日本人類学のフィールドも日本内陸から北海道、沖縄諸島、清国、台湾へと次第に拡大しつつあったのである。その後1900年10月、東京帝国大学理科大学人類学教室は、まだ日本の勢力圏に含まれていない大韓帝国も視野に入れ、人類学調査を行う必要性を感じるようになる。そこで選ばれたのが八木奘三郎であった。

日本社会全般における朝鮮への関心は日清戦争の前後から急激に高まり、歴史学界においても林泰輔や白鳥庫吉らの朝鮮史の関連論文が続々と発表されていた²⁴。同時に、人類学教室においても日本の石器時代人種論争²⁵の延長線上で、朝鮮への関心が寄せられつつあった。坪井正五郎が一方の主役としてかかわったアイヌ・コロボックル論争からもわかるように、両方とも日本の石器時代人は日本の祖先、つまり現在の日本民族ではないという認識では共通している。そこで、日本民族が渡来したと考えられる朝鮮に、果たして石器時代があったのかどうか問題として浮上したのである²⁶。こうした人類学教室を中心に広まった日本民族起源に対する社会的関心は、坪井正五郎の関心にもなり得る事項であった。こうした時代の要求に応じて坪井正五郎の率いる人類学教室は、予てから朝鮮研究の必要性を感じており、八木奘三郎の韓国派遣につながったのである。

ここで、八木の韓国派遣を決めた機関について確認しておきたい。『東京人類学会雑誌』の記事によれば、八木の韓国出発に際して「理科大学人類学教室員八木、人類学的調査の爲め韓国へ出張を命ぜられたり」²⁷(傍点引用者)とされており、調査を終えて帰国の際にも「東京帝国大学の命を受け韓国に於ける人類学上の探検を目的として久しく彼地を旅行し居られる八木氏は3月1日無事帰京されたり」²⁸と報じられていた。また1901年の2回目の調査のときにも「今年も亦東京帝国大学の命を受けて人類学上取調べの目的を以」²⁹て出発したことと、「東京理科大学より韓国探検の命を受けて、去る10月初旬より同国旅行中なりし、会員八木奘三郎君は、其の事を終へ、十数日前恙なく帰京」³⁰したことが報じられている。

八木が東京帝国大学理科大学人類学教室に所属していることは紛れもない事実であるが、上の記事から見れば、どこの命令を受けたのかが錯綜している。東京帝国大学の命を受けた場合、当時の正式な派遣経緯を考察してみると、下部組織から上部組織へ報告して、上部組織からの許可命令が下されるという形式になっている。要するに、人類学教室或いは理科

大学から東京帝国大学へ、そして東京帝国大学は文部省へ調査の許可を申請した後、正式に韓国調査の命令が下りるのである。この場合は、大体その成行きや文書等の記録を残したはずである。ところが、管見の限り、当時の東京帝国大学年報にも八木の派遣記録は掲載されてないし、また東京帝国大学から文部省の承認を得て命令を下すという、既存の命令体系に沿った最終的な調査・派遣命令状も見つからないのである。上述した鳥居龍蔵の場合は、東京帝国大学年報にも記録されており、また政府からの公式命令状も残されている³¹。これは八木奘三郎が東京帝国大学理科大学人類学教室に属していながらも、東京帝国大学からは正式の派遣命令を受けなかったことを意味する。言い換えれば、八木の派遣は東京帝国大学の海外進出において、各学科（ここでは人類学教室）が自らの目的を持って独自に推進することも可能だったことを示唆するのである。

また、調査経費に関しても同じことが考えられる。1900年冬、韓国調査中の八木が坪井正五郎に送った書簡には、「御送金の御返事今に無之寸時も待遠に被存候、併し此書面到達の頃は小生も右受取候上」³²と記されているように、八木は調査経費の追加を坪井正五郎に求め、その返事を待っていたのである。要するに、八木の韓国調査経費は文部省から定められた東京帝国大学の支出項目ではなく、人類学教室自らの財源（会費及びその他の資金）により賄われたことを窺わせる。こうしたことから、八木奘三郎を韓国へ派遣した機関は、東京帝国大学理科大学に属しているものの、正確には人類学教室単独で決行したことであると推察できる。日本の大陸侵出に伴う東京帝国大学の朝鮮半島調査は「官学アカデミー」³³の侵出と呼ばれるわけであるが、そのなかでは東京帝国大学直接の命令ではなく、人類学教室のように任意で調査に乗り出した場合もあったと推察される。ここでは、東京帝国大学の朝鮮半島調査は、東京帝国大学（或いは文部省）の主導する場合と各教室（学科或いは単科大学）

の推進する場合の二重構造を持っていたことだけを確認しておきたい。

それでは、人類学教室から韓国の調査に乗り出した具体的な目的は何だったのだろうか。まず、人類学教室の第1人者である坪井正五郎の意図から考察してみる。八木は韓国調査に先立ち、「研究方面は先生（坪井：引用者）の御指定」³⁴を受けたことを明かしており、人類学教室の韓国調査は坪井正五郎の意図と深く関係があると思うからである。

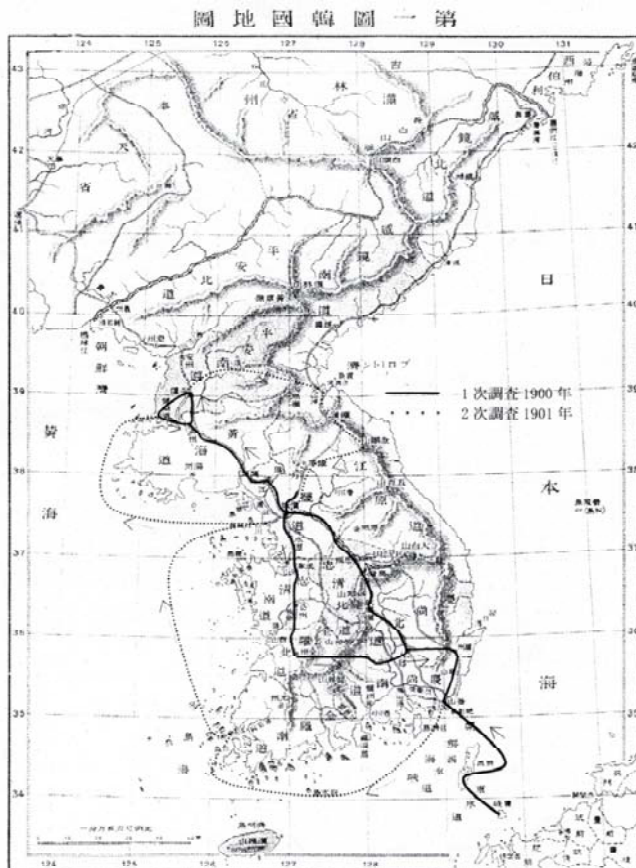
坪井の考えていた韓国調査の目的を窺がわせる資料として『世界風俗写真帖』（坪井正五郎編、1901年11月刊行）が挙げられる。これは坪井と人類学教室が所蔵している資料の写真を解説付きで編纂したものである。この写真帖は結果的に1901年11月に出版されるようになるが、その企画はさかのぼって2年前から始まったと思われる。

帝國大學人類學教室内
世界風俗写真帖
第一集五拾枚
第二集五拾枚
預約廉價
發售廉價
東京朝日新聞

(図1)『東京朝日新聞』広告覧1901、1、15

(図1) は、1901年1月15日附きの『東京朝日新聞』に出された『世界風俗写真帖』の予約募集の公告である。その目録には「アイヌ、琉球、台湾、韓国、支那、馬来群島、南洋諸島等の男女家屋家具服飾武器玩具薬品船舶漁獲具其他」と記されており、なかに「韓国」が含まれていた。この目録からは坪井の関心フィールドが当時拡大しつつあった日本人類学の範囲と合致していることが読み取れる。また、八木が韓国で1回目の調査（1900年10月20日東京発、1901年3月1日東京着）を続けている時期である。この『世界風俗写真帖』における韓国部の収録が、坪井の考えていた韓国調査の一つの目的ではなかったのだろうか。実際、韓国に派遣された八木奘三郎は調査の経過を坪井に悉く報告するとともに、韓国各地で直・間接撮影した写真も人類学教室へ配送していた。八木は1900年10月27日、釜山に到着して間もないうちに、「本日写真数葉及び見取図打形等数枚御送付」³⁵し、また「風俗写真は自分（八木）も大分撮影致候が、尚得らるる限りは購求の上御送付致候」³⁶という気構えができていたのである。そして、八木が1回目の韓国調査を終え、帰国した際には八木の撮影した写真の現像もほぼ終わっていた³⁷。

ところが、八木が韓国調査を終えて帰国した後も、『世界風俗写真帖』は出版されなかった。予約募集の広告を出した時点で、『世界風俗写真帖』出版の出来期限は1901年4月15日となっているが(図1)、上述したとおり、実際に出版されたのは約7ヶ月遅れの1901年11月のことである。人類学教室における韓国調査の目的が坪井の『世界風俗写真帖』の出版と関係



八木奘三郎の韓国調査経路（関野貞『韓国建築調査報告』東京帝国大学、1904年をもとに作成）

があることを疑わせるもう一つの部分である。結果的に八木による韓国調査は1900年と1901年の2回にわたって行われたが、最初から2回の調査を想定したわけではない。始めに韓国調査に乗り出した際にも「旅行滞在の日数は凡そ30日の予定なるが或は多少延長するやも知れず」³⁸と記されており、調査の目的を達成するために多少延長されることは予想されていたものの、2回目の調査予定は入っていなかった。

1901年10月3日、再び東京を出発することとなった2回目の韓国調査は、前回で予定されていた調査事項に対して「既に如斯困難有りて最初の目的を全ふすること能はず」³⁹という記述からも分かるように、1回目に予定されていた調査事項を完成することになった。左の地図は、八木の2

回にわたる調査経路を復元したものである⁴⁰。これをたどってみると、八木の1回目の調査が不完全に終わったことと、2回目の調査がそれを補う形で行われたことがわかる。

八木の2回目の旅程は平壤から元山を經由して京城まで廻る道程が中心になっているが、元山地方は八木の1回目の調査から抜け落ちたところだったのである⁴¹。出発の際には、「今回は遠く平壤より義州附近にまで至りまた元山地方をも探求せらるべき予定」⁴²と、平壤より北の方面まで視野に入れていたが、調査期間が短かったためか義州方面の調査は行われなかった。

さらに、2回目の調査では、同じく人類学教室から蒔田鎗次郎も同行している。元山から発信した蒔田の手紙には「今回は人種撮影を勉めて致し居候」⁴³と記されており、人類学教室における韓国調査の目的は明らかに『世界風俗写真帖』を念頭に置いた人類学的調査だったことは間違いないだろう。

1901年11月下旬、八木の帰国を待っていたかのように、『世界風俗写真帖』は出版された⁴⁴。この書の冒頭には、「編成に関する材料の選択、解釈の説明等は主として坪井の創意発案」によるものであり、台湾と韓国の部は、特に鳥居龍蔵と八木熒三郎に委ねていたことが記されている。「台湾部の編成につきては前述の鳥居氏より、韓国部につきては彼地を跋涉されたる人類学教室員八木熒三郎氏より、いづれも談話を聞き、若くは記述を需めたり」とされ、また写真撮影に関しては八木と同行した蒔田鎗次郎の名もあがっている⁴⁵。要するに、人類学教室における八木の韓国派遣は、坪井の「創意発案」にかかわる『世界風俗写真帖』の出版と深くかかわっていたのである⁴⁶。

次に、人類学教室は韓国調査に当って、もう一つの任務を八木に与えている。韓国における人類学的・考古学的の資料蒐集がそれである。当時人類学教室では、付属標本陳列室の増設を企画しており、そのうち1室を外国古物陳列室にあてることを決めていた⁴⁷。そこに答えるべく、八木は釜山に到着して間もない1900年11月2日には小包1個を送り、また釜山から京城へ出発する前には「祝部類十個買求候右は帰途献納品其他と共に差出可申候（中略）当港に集れる古器余程のものに候小生都合にて悉皆内地に持帰り候心組にて候」⁴⁸と資料収集の意気込みを述べている。

さらに、京城に到着した後に送った手紙には「標本の内かなり上等の衣服一揃買求候尚小児の分も取揃候心組に其他古鏡古ヒ古箸古陶器を初め十手鈴（神女の持つ鈴）煙草入等夥多買入候凡て韓地は内地にて予想より遥かに高価に候へ共今回の旅行は必ず朝鮮物にて一室を要し候位に集め候心組に候」⁴⁹（傍点引用者）と、人類学教室の陳列室への展示を念頭に置いた記述も見られる。その展示には韓国の民俗資料だけでなく考古学的資料も含まれている⁵⁰。平壤から再び京城に戻ったときにも「従来来蒐候品物四箱差出申候」⁵¹と報告しており、八木の帰国の際には「同氏（八木熒三郎：引用者）の採集に係る土俗品及び古器物何れも到着」⁵²したことが報じられた。このような人類学教室の陳列室を満たすための韓国資料の蒐集も、人類学教室が八木に托した韓国調査の目的であった。

一方、人類学教室における韓国調査の具体的な目的とは別に調査者本人である八木熒三郎は韓国調査の目的と経緯について、次のように述べている。

「予は平素人類考古歴史等の学問上より我天孫人種の故地を探り兼て両国の關係点を

事実上より研鑽せんと欲し、多年内地の遺跡遺物を探討せしが其結果として韓国調査の必要を認め之を坪井理学博士を謀りて彼地渡航の便を得たり」⁵³

この記述から、八木自身の考えている韓国調査は、当時人類学会を中心に展開されている石器時代人種論（「天孫人種」の解明）と連動していたことがわかる。八木の朝鮮半島への関心は日本人類学界の要望に答えるため、古代の日本と朝鮮との関係点を探ることから出発したのである。八木の唱える「韓国調査の必要」が坪井正五郎を動かし、その結果、人類学教室における韓国調査の道が開かれたかどうかは分からないが、少なくとも当時坪井正五郎が唱える近隣諸国の人類学的調査と符合するところはあったと思われる。

ところで、ここで注目したいことは、八木は人類学教室の求める人類学的調査だけにこだわることなく、「人類考古歴史等の学問上」より韓国調査に臨んでいたことである。後ほど八木は「偶ま明治三十年機内地方の調査に際し、我邦ほど古蹟、古物の多き所なく、此材料を握って研究すれば、確かに一頭地を抜くことが出来ると信じ、遂に斯学問（考古学：引用者）に進むことに決心」⁵⁴したと述べ、人類学より考古学に関心を向けていることを明かしている。だからこそ、釜山に着いたときには「韓人の研究は固より必要に候へ共」と、坪井と人類学教室からの研究方面の「指定」を言及しながらも、「小生の主眼と致候古墳関係の遺物は図らざる点より、到着の日直に古今無比の優等品を一見仕候、是等の内には未だ小林君⁵⁵の知らざるもの多く天小生の来着を待ちしかと思はる程の喜を覚へ申候」⁵⁶と古墳関係の遺物に関心がある事や、「到着の日直に古今無比の優等品」を目にしたときの喜びを歡喜あふれる語調で語ったのである。また、人類学と考古学の明確な線引きが不分明な時期ではあるものの、八木の関心事は徐々に考古学へと傾斜していたことがわかる。要するに、八木の韓国調査は人類学的調査と考古学的調査を交錯させた形で行われたといえるだろう。八木の韓国調査を人類学的・考古学的調査と呼ぶ所以であるが、特に考古学的側面は、人類学教室の要望とは関係なしに八木自らの発意による調査だったということを確認しておきたい。

以上のように、八木熒三郎によって行われた朝鮮半島の人類学的・考古学的調査は、日本人類学界における朝鮮半島への関心の高揚が、日本のアジア大陸侵出に伴った東京帝国大学の海外学術調査の流れのなかで実現された結果であった。さらに東京帝国大学理科大学人類学教室が八木に託した韓国調査の具体的な目的は、坪井正五郎による『世界風俗写真帖』編纂のための資料蒐集と、人類学教室附属標本陳列室の増設に伴う「朝鮮物」の蒐集にあった。一方、八木は人類学教室から託された朝鮮半島の人類学的調査を遂行すると共に、自分が関心を持つ遺跡・遺物を中心とした考古学的調査も任意で着手した。八木は韓国調査の後、人類学的内容の論文は主に『東京人類学会雑誌』に載せ、また考古学的内容の論文は『考古界』をはじめ、他の雑誌に投稿している。

以下では、八木熒三郎が発表した論考を中心に、彼が韓国においてどのような遺跡・遺物に着目したのかを探るとともに、そこから生まれた八木の「韓国の美術」論はどういう特徴を持っているのかを検証する。

3、八木奘三郎の人類学的・考古学的調査の内容

八木奘三郎は2回にわたる韓国調査をもとに、多数の論文を学術雑誌に投稿した。特に、1901年と1902年の調査直後に集中的に発表している。台湾から戻った翌年（1904年）からも少しずつ各雑誌に掲載されてはいるが⁵⁷、1905年を皮切りに韓国関連論文が一旦途絶えてしまう。大正期に入り、八木は再び韓国と縁を結ぶことになるが、それまで韓国関連の論文は書かなかったようである。韓国の実地調査後から1905年までに出版された論文は以下の通りである。

(表1) 八木奘三郎の発表した論文（1901—1905年）

八木奘三郎	韓人の間に行はるる冠り物の種類	東京人類学会雑誌181	1901年4月
八木奘三郎	韓国京城論	考古界1-1	1901年6月
八木奘三郎	韓国に現存する日本の古城蹟	歴史地理3-7	1901年7月
冬嶺	日韓古史断に載せたる古器物評	考古界1-2	1901年7月
八木奘三郎	韓国探検報告（其の1）—韓人の衣食住と冠婚葬祭	東京人類学会雑誌185	1901年8月
八木奘三郎	韓国古代の陶器模様	東京人類学会雑誌185	1901年8月
八木奘三郎	韓国考古資料通信	考古界1-6	1901年11月
八木奘三郎	韓国の美術	時事新報	1902年1月1日
八木奘三郎	韓国の美術につきて	考古界1-8	1902年1月
八木奘三郎	韓国の王宮	国士	1902年1月
八木奘三郎	韓国仏塔論	考古界1-8,1-9	1902年1,2月
八木奘三郎	朝鮮に於ける古器及び土俗品	時事新報	1902年3月23日
八木奘三郎	朝鮮に於ける古器に就て	大日本窯業協会雑誌116	1902年4月
八木奘三郎	八木奘三郎君の朝鮮考古談	考古界1-11	1902年4月
八木奘三郎	韓国探検日記（1, 2）	史学界4-4, 5	1902年4, 5月
八木奘三郎	韓国里程標	東京人類学会雑誌194	1902年5月
八木奘三郎	韓国男女写真図解	東京人類学会雑誌216	1904年3月
八木奘三郎	韓国の美術	国華169	1904年6月
八木奘三郎	韓国の美術	考古界4-2	1904年7月
八木奘三郎	韓地の撐石	東京人類学会雑誌229	1905年4月
八木奘三郎	韓国の美術1-3	日本美術73-77	1905年

上述したように、八木の韓国調査の特徴は人類学的調査と考古学的調査が混じって行われたことにある。こうした八木の調査内容をふまえて、のちに専門研究としてつながるだろうと思われる三つの分野を、彼の論考から抽出することができる。第一に、人類学的見地から出された論文として「韓人の間に行はるる冠り物の種類」（『東京人



図2、韓国の冠りもの（八木、1901）

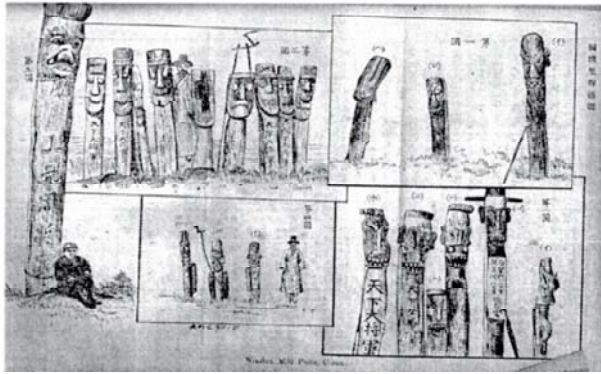


図3. 韓国里程標 (八木, 1902)

の現地調査をもとに書かれた人類学的調査は、最終的に、その源流を探るところで終わっている。要するに、冠り物に関しては「西方支那より入れるものと北方満州より入れるものと東南方の南洋より来れるもの」があるとし、里程標に関しては「遠く南洋」にその根源があると推測したのである。八木の人類学的所見の真偽は分からないが、学術的資料として朝鮮の民俗をいち早く日本へ紹介したことに意義がある。そのほか、八木が朝鮮の衣服や日用器具などの民俗資料(図4)を東京人類学教室にもたらしたことはすでに述べたとおりである。



図4. 韓国日用器具(坪井編『世界風俗写真帖』1902年から) 皆之を集め置けり」と記しているように、日本の勢力拡大とともに進出していく日本人類学のなかで朝鮮研究の必要性を位置づけているところにある。

第二は八木が韓国へ渡る前から関心を持ち、自らの発案で行った考古学的調査のうち、とくに日本での発掘調査の経験がある石器時代の遺跡・遺物に関することである。いわゆる先史考古学に関する研究であるが、朝鮮半島全域の踏査を急いでいたためか個別の論考は「韓地の撐石」⁵⁸(『東京人類学会雑誌』229、1905年4月)の発表に止まっている。韓国調査から3年以上も経過してから発表した撐石の研究では、元山附近で十数個の群集を発見したことと、主な分布地として「全国京畿道以北の地に間々存在」することを明かしている(図5)。しかし、「予も前途を急ぐ旅行なりしを以て発掘する遑」ないという理由で、その撐石の研究は形状を中心にする構造の分析に終わっている。こうした八木における朝鮮の撐石論考は、植民地期に入り、鳥居龍蔵をはじめ、小田省吾、榎本亀次郎、藤田亮作などといった朝鮮総督府の古蹟調査委員に引き継がれるようになる⁵⁹。

一方、個別の論文は発表していないものの、八木が注目した考古学的遺跡には古墳の存在も

類学会雑誌』181、1901年4月)と、「韓国里程標」(『東京人類学会雑誌』194、1902年5月)が注目を引く。朝鮮の冠り物に関しては朝鮮全域のものを地域別・男女別に「28種34通り」に分け、その名称や用途などを細かく説明しており、また、「韓国里程標」についても名称の由来や種類、そして里程標が作られた目的などの解説を加えている(図2・3)。こうした八木の朝鮮全域

だが、八木による朝鮮の人類学的調査の本質は、「今日は我近傍諸国の人民中アイヌ、琉球人、台湾土人等を初めとして南洋諸島、支那、満州等に至るまで大略は斯種の事柄判明し来れるも、果して精密に調べ上たりや否やは疑はしき次第なり、就中隣邦朝鮮の事情に至ては一層不明なりしを以て、予が今回の旅行中其見聞に触れたる類は



図5、韓地の撐石（八木、1905）

は松岳山麓⁶³の古墳を採検し、同一古墳から彫刻ある石棺や青磁・白磁が発見されることを確認する⁶⁴。また、高句麗の古都平壤に至ったときは、「平壤の大同江手前に郊原有りて其低地に近き所に大なる古墳と覚しきもの有之候」⁶⁵と報告している。

朝鮮全土にわたる概略的な古墳調査を終えた八木は、「古物遺跡の如きも黄海平安の二道は今日の人口希薄なるが如く古昔も甚だ少なりしと見へてとんと大古墳を見ず一方は開城近辺に留り一方は平壤近くに限らるゝが如き現象有之候而して慶尚道は割合に多く各地共存在致候」⁶⁶と述べ、朝鮮に於ける古墳の主な所在地が慶尚道、開城周辺、平壤の三ヶ所であることを明らかにした。そのうえ、「将来考古学的に詳密なる調査を遂げ度は第一が三南にして余力あれば猶西北にも逮ばし候方可然と被存候」⁶⁷と語り、慶尚道を中心とする三南⁶⁸を考古学的調査の最優先地域として位置づけ、余力のある場合は開城と平壤の西北地方へ進むべきであるとしたのである。後の朝鮮総督府が推進する朝鮮古墳調査も八木の述べた三ヶ所を中心に展開されることになる。さらに、平壤の大同江周辺における古墳調査の際には、鳥居龍蔵が「遼東より持帰られたる高麗時代の古瓦に存ずる模様と等しきもの」⁶⁹があることを発見し、この地域の瓦が「遼東よりかけて大同江の沿岸に」⁷⁰まで及んだという認識を持った。これに関して、清野謙次は「之れ（瓦・磚）は南部地方に見ざりしもので、八木氏は支那式墳墓だと断じた。後年楽浪の漢代古墳の発見は実の所八木氏に初まって居る」⁷¹と書いたように、植民地期を通じてとくに注目された楽浪調査⁷²も八木の古墳調査によって端緒が提供されたのであった。

第三に、韓国調査の前から朝鮮史を熟知していた八木は調査を進めるなかで、朝鮮の歴史時代の遺跡・遺物にも関心を持つようになる⁷³。八木の論考の中で目立つのは、城郭を扱った「韓国京城論」（『考古界』1-1、1901年6月）、「韓国に現存する日本の古城蹟」（『歴史地理』3-7、1901年7月）、「韓国の王宮」（『国土』1902年1月）と、陶磁器を扱った「韓国古代の陶器模様」（『東京人類学会雑誌』185、1901年8月）、そして仏塔に関する「韓国仏塔論」（『考古界』1-8,1-9、1902年1月、2月）である。まず、八木の城郭に対する関心は、1900年5月の「筑前の高良山及糸島郡雷山の神籠石調査」⁷⁴から持ち始めたようである。同年11月、韓国釜山の近くにある東萊城を観察した八木は、「余は初て当城を見候時彼の神籠石の解釈は此一城にて充分の例に供し得へし」⁷⁵と、自分の立てた城郭説が正しいことを確信する。こうした神籠石に関する関心は自然に朝鮮の城郭へと向けられていった。八木は「韓国京城論」において京城を囲む城壁の構造の大要を説き、八門と朝鮮の王宮についても言及した⁷⁶。ま

あった。最初に釜山に着いて間もなく、「小生当港近郊を探りて墳墓の研究を致候が其種類五六種有之候事を知り」⁶⁰と語った八木は、その後も古墳に注意を払いながら北上していった。八木の目にした古墳は、慶尚道の釜山周辺だけでも「古墳は洛東江の左右及び其以南に多」⁶¹く、「釜山鎮の裏山に登りて墳墓の夥だしきに驚けり」⁶²というほどであった。高麗の古都開城で

た、「韓国に現存する日本の古城蹟」においては、文禄の役（壬辰倭乱）のとき、豊臣軍が築いたとされる八箇所の古城址を調査し、日朝両国の関係を古い遺跡に基いて叙述している。こうした歴史時代の城郭論に関しては、直接足を運んで実地調査を行った場合もあるが、概ね朝鮮の歴史書などの文献を参考にすることが特徴である⁷⁷。

次に、朝鮮の陶磁器調査の場合は、日本でも朝鮮古来の焼物については古くから知られており、在朝日本人の間でも所蔵品として人気があったようである。八木も朝鮮半島の踏査の途中に、遺物蒐集のため、度々在朝日本人のもとを訪れ、彼らの所蔵している陶磁器を見聞していた。その時まで朝鮮陶磁器に関する学術的な研究は行われていなかったため、八木は朝鮮陶磁器の全体像を通史的にまとめようとした。「韓国古代の陶器模様」では古代から朝鮮時代まで沿革を描くとともに、朝鮮の陶磁器を歴史的・技術的に分類し、また「新羅焼」という新しい造語まで生み出した。それまで「愛好家の趣味」として受け入れられていた朝鮮の陶磁器を、学術の対象として分析したのである⁷⁸。八木による陶磁器調査は、瀬戸古窯址調査（1910年）と李王家博物館在職時の古窯址調査をへて、後には古陶磁の研究方法を古窯址の発掘調査に着眼及び実行した開拓者の一人として高く評価されるようになる⁷⁹。

それから、仏教遺跡に関する調査であるが、八木の論考のうちには、寺院や仏像などといった仏教遺跡に関する記述が極めて少ない。韓国踏査中に各地の寺院へと足を運んだ足跡は確認できる。ところが、釜山近郊の梵魚寺を訪れたときには「寺院は荒廃し見る影もなしと雖も建設当時の壯観」⁸⁰が思い浮かべる程度の感想で終わっており、仏像に対しても「高麗時代に属する弥勒の仏像は韓地に尤も多くあるから其内総括して紹介しやう」⁸¹としたように、朝鮮の仏像に対する観察も行ったようだが、その詳細が論文として発表されることはなかった。代わりに八木が仏教遺跡の中でもっとも関心を寄せていたのは「仏塔」であった。

八木は「韓国仏塔論」の冒頭で、「予は嘗て伊東忠太氏が右の研究結果を史学雑誌に出されしことを知れり、而も清韓両国の如何に速ばざりし為め、折角の緻密なる研鑽も効果甚だ乏しきの観ありき、予は本邦の木塔が如何なる順序を経て建設せられたるかの疑問を懐き其眼を以て韓地を視察」したと述べ、まず韓国の仏塔を研究する意義として、韓国と清国、韓国と日本の比較研究にある事をあげている。

そして、韓国の仏塔の分布については、「廣尙道梁山郡梵魚寺、同上通度寺、同慶州府、慶尙道聞慶、同上仁同郡倭館驛近傍、全羅道益山、忠清道扶余、同上稷山、同上忠州郡塔坪、京畿道利川、同上京城、同上礪州、同上松都、江原道金剛山神溪寺、同上楡岾寺、同上塔洞、咸鏡道釋王寺、黃海道、平安道平壤、同上成川」など各道の主なるものをあげると同時に、これは「僅に其一端に過ぎずして寺院の廢墟、及び現存の大寺は概して仏塔を有せり」⁸²と書いた。さらに、日本人が朝鮮の各地で仏塔を探す場合は、その数の多さに驚くだろうとしたうえで、仏塔の存否を知るためには各道にある『群誌』を参考にすればいいと付け加えている。

これは、八木が朝鮮各地の調査中、仏塔が数多く存在していることを確かめたうえでの叙述であるが、日本人のために丁寧にも仏塔の所在を確かめる方法まで記録しておいた。のちほど、朝鮮の仏塔のうち、歴史書や古文獻などで登場する有名なものは建築家関野貞によって精密に調査が行われるようになるが、一方で、数の面で最も多く余り知られていない、各道に所在する仏塔は民間の日本人によってさばかれて売買されるようになる。植民地期に入

り、朝鮮に移住した日本人の中には、自分の庭園に朝鮮の仏塔を設置する風潮が広まり、朝鮮の仏塔は庭園に飾る朝鮮的な趣味として定着をみせた。学者による仏塔の調査であれ、民間人による朝鮮的な趣味の道具としてであれ、朝鮮の仏塔に対する関心は八木によって公の場にさらされるようになったといえる。

このように、八木における韓国の人類学的・考古学的調査のうちには、多方面にわたる朝鮮の遺跡・遺物に関する調査も含まれている。八木は日本考古学界において「先駆者」と評価されているが、彼はまた、韓国においても遺跡・遺物研究を行った日本人の嚆矢であった。ところが、上述したように、八木の韓国調査の主目的は人類学的調査にあったため、任意で行った遺跡・遺物調査は全体像を把握するだけの一般調査の性格を帯びるものになっている。

4. 八木奘三郎における「韓国の美術」論（1900—1905）

・八木奘三郎の朝鮮認識

八木奘三郎が韓国調査を行うとき、どういった朝鮮観を持っていたのだろうか。彼の「韓国の美術」論を分析する前に、彼が考えている朝鮮について考察してみよう。

1895年2月、八木は『東京人類学雑誌』に「朝鮮京城内ニ存スル竪穴類似ノ小屋」と題する短い記事を書いた。人類学会会員で、京城で日本語を教えていた岡倉由三郎に「自己ノ取調ブル件ニ付」いて手紙を送り、その返事を得て掲載したものである⁸³。その頃の八木の関心は日本各地の古墳にあったようである。1895年5月26日に行われた考古学会例会においては自ら古墳について語り⁸⁴、坪井正五郎も「八木奘三郎氏の『武蔵各郡に於ける古墳の分布』と題する文は実に永く記憶すべき」⁸⁵であると称えている。

さらに1895年、清国に派遣されていた鳥居龍蔵からの書簡では、中国との境にある朝鮮の義州地域に言及しながら、朝鮮の紋様や里程標などについても語られていた⁸⁶。（表1）からも分かるように、八木が韓国調査を終えて書いた論文には鳥居が言及した朝鮮の陶器紋様と里程標に関するものが含まれている。すでに韓国に対する八木の関心は、1895年頃から芽生えていたのである。

ところが、朝鮮への関心の傾斜は八木だけではなかった。周知の通り、明治初年から国交問題を取り上げていた日本は、征韓論、日朝修好條規（江華島條約）を経て、西洋列強に先駆けていち早く朝鮮へ侵出しており、やがては朝鮮をめぐる清国と戦争を起こすまでに至った。日清戦争は日本全国目の朝鮮に集中させ、この間、学界における朝鮮研究の機運も爆発的に高まったのである。旗田巍は、日清戦争を挟む時期は日本における近代的な朝鮮史の研究が現れた時代だったとしたうえで、次のように語っている。

「日清戦争前後の時期は、朝鮮問題が朝野の関心を強く集めた時代であった。学界の目も一斉に朝鮮にそそがれていた。歴史学だけでなく、言語・地理・法制などの諸部門でも朝鮮研究がさかんであった。歴史学の部門では、管政友・吉田東伍・林泰輔・坪井九馬三・那珂通世・白鳥倉吉・幣原坦などが相継いで朝鮮史研究の論文・著書を発表した」⁸⁷

こうした状況の中で日本国内の古墳に対する研究を進めていた八木にとって、その関心領域が朝鮮にまで及ぶようになったのはごく自然な流れだったといえよう。八木は歴史学の部門で刊行され始めた朝鮮史研究の論文・著書にも目を通している。たとえば、吉田東伍の『日韓古史断』(1893年)については「本書の如きも主眼とする所が記録の上のみにあるから一物一個断定し得る事が唯だ長文に渉て錯綜する風が見へる」⁸⁸と述べ、実地調査を行わずに「朝鮮物」を語ることにについて厳しく批判していた。さらに、韓国調査のときには、幣原坦や金沢庄三郎とともに京城で愉快的時間をすごしたとされており⁸⁹、坪井九馬三は八木の『満州考古学』(1928年)に「序」を寄せるなど、朝鮮史に関心を持つ当時の歴史学者と直接・間接に関り合っていた。

1900年10月の韓国調査の着手時点において、「平素人類考古歴史等の学問上より我天孫人種の故地を探り兼て両国の関係点を事実上より研鑽せんと欲」⁹⁰していると書いたのは、こうした朝鮮史への関心が反映されたのであろう。八木の韓国調査の学問的土台は人類学・考古学とともに歴史学の分野まで広がっていたのである。もちろん、八木は歴史学者でもなく、ましてや朝鮮史研究者でもない。にもかかわらず、八木は朝鮮史研究とかかわった歴史学者との親交を深めるとともに、彼らの書いた朝鮮史研究の関連論文を読んでいた。韓国調査中には、「聞慶滞在中に憲兵隊の為に朝鮮史を二回講じた」⁹¹とされており、韓国の歴史については相当熟知していたことがわかる。

それでは、八木が習得したと思われる当時日本で流布していた「朝鮮史像」は、どういう特徴を有していたのだろうか。日清戦争の前後に、日本社会に広がりつつあった「朝鮮観」の形成に関して、旗田巍は重野安繹・久米邦武・星野恒らの著述した『国史眼』(1890年)に注目する。

「この書は、やがて小学校や中学校の日本史教科書の手本となり、国民の教育に大きい影響を与えた。ここで注目すべきは、この書が国学の伝統をひく「日鮮同祖論」の立場で日本と朝鮮との歴史的關係を考えたことである。(中略) こういう歴史解釈から当然に朝鮮についての一つの歴史像が作りだされた。それは朝鮮は神代の昔から日本の支配下にあったという歴史像である。この歴史像は、やがて歴史教科書を通じて広汎な日本国民の心にうえつけられていく」⁹²

この時期に、日本で広まった朝鮮の歴史像の核心は、『日本書紀』や『古事記』などの古典を根拠にした「日鮮同祖論」だった。江戸時代の国学者が神代までさかのぼって日本の朝鮮支配を主張したものが、明治になって「日本国民」にまで普遍化されたのである。八木のかかげた「我天孫人種の古地」の探索云々も、こうした古代における日本の朝鮮支配を信じて発せられたものであった。実際、韓国調査中には、明確な根拠を示さないまま「慶尚道は東方日本の感化を受事多き為に」⁹³や「慶尚道は日本的にして忠清以北は高麗的に候」⁹⁴などという文面も確認できる。同じような認識は遺物を鑑識する場面でも見られる。祝部土器については「本邦に於ける祝部風の製陶術は韓地の伝来なりとは何人も異議なき説なれ共、前期の如く素焼類の彼地に存するを見れば、右は日本より教授せし風と謂て宜しからん」⁹⁵と

語っていたのである。

日清戦争の直後から盛んになった朝鮮史研究の特徴の一つは、記紀を中心とする古代史の解明に集中していたことである。日本における明治20年代は人類学や考古学だけでなく、近代の歴史学もまた歩みをはじめた時代であった。さらに資料の制約も多く、「成熟した近代的歴史観」を持たない時期に行われた日本の朝鮮史研究は、日本の古代史を解明するのための「朝鮮史」へと傾いていたのである。歴史家でもない八木が、当時流行っている朝鮮史像を検証もないまま受け入れたと考えるのも不自然なことではない。

こうした日本で広まりつつあった朝鮮史像を踏まえて、韓国の釜山に到着した八木は、初めて目にした朝鮮について次のように語った。

「彼等の生活状態を一見致候が其不潔醜陋なる殆ど驚くばかりに御座候嘗て歴史を読みたる當時はかゝる有様を夢にだも思ひ浮ばざりしが實見して初て當國旅行者の報道の虚ならざるのみか却て其足らざるを知り申候小生は今後是等の非人小屋に劣る矮小汚穢の菴に旅寝の日数を重ねる譯に候が出發前に聞し流行病は實に免れざるものたるべしと存候」⁹⁶

まず、生活状態から言及している韓国の初印象は、「不潔醜陋」や「非人小屋に劣る矮小汚穢の菴」に代表されるものであった。日本では日清戦争の前後から、旅行者・軍人・商人などによる旅行記や冒険談などが紹介されつつあったが、そこで朝鮮は、すでに「不潔醜陋」に代表される野蛮のイメージで描かれていたのである。このような朝鮮観は八木にも焼きついており、韓国に到着してからは、実見の名を借りて、むしろ「當國旅行者の報道の虚ならざるのみか却て其足らざる」と決め付けたのである。

八木が感じた「不潔醜陋」のイメージは、到着した釜山だけの印象ではなく、彼の全土調査中に書かれた報告書に度々見られる。たとえば、釜山を出発して梵魚寺に宿泊したときは「韓国の寺は不潔甚だしく又畳とてもなければ土敷の上へ紙張にせしのみ過ぎず」⁹⁷と紹介しており、「開城以西は韓人の旅舎遙に京釜間より不潔に候為従来免れ来れる床虫に犯され一夜眠り得ざる時も有之候」⁹⁸とも書いている。さらに、2回目の調査に際しても、平壤の水運に触れて「彼等は場合に於て野蛮人だにも若かざる幼稚の風あるかと被考候」⁹⁹と変わらぬ考えを持っていた。こうした朝鮮認識は、当時人類学教室から外国の僻地に派遣された同僚からの文面にも多く見られるが、その裏面に潜んでいるのは明らかに日本の文明に対する野蛮のイメージであったのである。

・八木奘三郎の「韓国の美術」論

明治20年代以降、日本の朝鮮史研究は、主に政治史を中心に展開されており、朝鮮における文化的側面の関心は生まれていなかった。旗田巍が指摘しているように、朝鮮史の社会的・経済的側面の研究が福田徳三の手で開拓されたとするならば¹⁰⁰、文化的方面の研究は八木奘三郎の手で開かれたといえる。かれは韓国における遺跡・遺物調査を終えた後、1902年から1905年にかけて「韓国の美術」と題する論文を『時事新報』(1902年1月1日)と、『考古界』(1902年1月・1904年7月)、『国華』(1904年6月)、『日本美術』(1905年)といった学術雑誌で発表した。

5回にわたって掲載された「韓国の美術」論は一部の修正と加筆をしているが、基本的には同一論文とみてよからう¹⁰¹。

八木の「韓国の美術」論は、大別して二つの特徴から論じることができる。第一の特徴は、美術を韓国の歴史に照らして叙述したことである。日本において美術の流れがすでに日本の歴史区分とともに説明されていたごとく¹⁰²、八木も韓国の美術の変遷過程をその歴史の区分に合わせて当てはめた。要するに、八木は、韓国の歴史上の区分を三韓時代(紀元前2世紀～4世紀頃)、三国時代(4世紀頃～7世紀頃)、新羅統一時代(7世紀中頃～10世紀初頃)、高麗時代(918年～1392年)、朝鮮時代(1392年～)に分け、それぞれ美術上の特徴を導き出したのである。

八木は、韓国における「美術上の観念」は上古の三韓時代から始まり、三国時代に至っては仏教の伝来とともに美術上の認識も徐々に高まったとした。その後の統一新羅時代をへて高麗に至ると、「仏法の隆盛最も甚だしく、随て作品の記事二三に止らず、或は絵画彫刻有り、或は螺鈿玻璃の類有り、妙技精芸人目を驚かすもの多かりしが如し」¹⁰³といい、朝鮮時代に対しては「政略上仏法を打破して大に儒教を重んぜしが、其結果として美術工芸の類は却て退歩せし形迹を示しぬ」¹⁰⁴と評価している。

上古の三韓時代については実物を確認することなく、古い歴史書に登場する装飾や器具等に鑑みて美術の発達は早くからあったろうと推測したものだ。ここで注目したいことは、高麗時代と当時の朝鮮に関する美術認識である。日本における美術史の時代区分も仏教遺跡や遺物と多く関連があったように、八木は朝鮮における美術上の観念も仏教と関連付けて成長・衰退したと把握した。さらにその最盛期として高麗時代を取り上げている。高麗時代を朝鮮美術の最盛期と評価したのは、朝鮮の仏塔に関する解釈にもみられる傾向であった。

八木は韓国の仏塔に関して、最も古い「古塔」として中国唐代の作をあげ、次に高麗と朝鮮という流れの三期に分けた。そして各時代別の特徴として「古塔尤も単純にして第二期の高麗に入りては紋様を施せる風を生じ、第三期の李朝に進みては復旧に返りて而も雄大の風を歛ける」¹⁰⁵という評価を下している。八木の目には韓国の仏塔が中国唐代に始まり、高麗時代に花を咲かせたあと、朝鮮時代に入り衰退の道に入ったと映ったのである。

八木が高麗時代の仏塔を最も高く評価した要因の一つとして、京城のパゴダ公園内の「蠟石塔」¹⁰⁶の存在がある。この「蠟石塔」は八木が京城を訪れる以前から、広く世間に知られている遺物であった。日本人による記録だけでなく、西洋人も注目し、英文で世界に紹介されるほどであった¹⁰⁷。当時の日本人の間では「蠟石の塔」と呼ばれていたが、八木は「寒水石の塔」とも呼んだ。その石質が「大理石か寒水石かの類」¹⁰⁸と把握したために、「寒水石の塔」と命名したわけであるが、間もなく大理石である事が明らかになり、八木の命名した「寒水石の塔」は世間から忘れ去られた。この有名なる「寒水石の塔」について、八木は「之を技術上より見る人は未だこれなきが如し」¹⁰⁹と意義を唱えたうえで、次のように論じた。

「塔は中央に在りて、碑は前面の右側に建てり。塔の高さは六七間に充たざれども、四周上下悉く緻密の彫刻を施したる工合は、實に国宝の一に数ふべき価値あり。其の種類は、上部に三尊の弥陀を彫り、漸次下りては、或は仙人、或は孔子、其他老子などを初めとして、帝釈不動の類殆ど目を驚かすばかりの絶技を弄せり」(傍点引用者)

「技術上」の分析といいながら、これ以上の分析はしていなかったが、八木の目には「寒水石の塔」が朝鮮最高の「実に国宝の一に数ふべき価値」あるものとして映ったのである。また、碑文からは「大円覚寺」の所在地である事まで突き止めたあと、その場所が高麗の古都「開城」であると断定し、のちほど京城に移されたのではないかと推定した。したがって、八木は京城の「寒水石の塔」を高麗時代に建設されたものであると確信したうえで、さらに「高麗時代の絶品」¹¹¹として位置づけたのである。この塔の存在が八木をして、高麗時代の遺物こそ朝鮮の歴史中最も優れた美術品であることを定型化させた一つの要因だった。

ところが、「寒水石の塔」が高麗時代の遺物であり、李朝時代に入って京城に移されたという八木の解釈は、当時の京城で居住していた幣原坦によって根拠のない主張だと厳しく非難された¹¹²。この塔について本格的に調査を行い、論文としてまとめ発表したのは関野貞によってである。この「蠟石塔」あるいは「寒水石の塔」は、のちに関野貞によって「京城廢大円覚寺石塔婆」¹¹³と新たに命名されるようになり、現在の「圓覺寺址十層石塔」とよばれる根拠を提供した。その後、京城で住まいを持つ浅見倫太郎の研究¹¹⁴や関野貞の修正¹¹⁵をへて、圓覺寺址十層石塔は高麗時代の産物ではなく朝鮮時代のものであり、塔の建てられた場所である「大円覚寺」も高麗の古都開城ではなく、京城のパゴダ公園その場所だったことが判明するようになる。

ともかく、八木は、こうした美術上の絶頂期も朝鮮時代に入ると、政略上の理由から儒教を重んじたため、仏教の衰退とともに美術も「形迹」すら見えないくらいに退歩したと断定する。こうした当時の朝鮮の美術に対する八木の認識は、上述した彼の朝鮮観と一脈相通するところがある。結果的に、歴史上の朝鮮美術は、「三国時代は少年より成丁に達する意気旺盛の趣きを示し、新羅の統一より高麗の治世は大人の思慮周密の所置を執れるが如く、李朝に逮んでは全く老衰の観を呈せり」¹¹⁶という結論にいたっている。

ここで興味深いのは、彼が朝鮮美術史と日本美術史とを対比し、朝鮮の美術は、日本の美術よりも数百年も遅れていると主張したところである。

「韓地の美術品は我邦に比して云はば、三韓時代は応神帝以前の如く其の存否を確定す可き品なく、三国より新羅統一の世は古墳時代に推古朝を加味せしかの観あり、高麗に至りては純然たる寧楽七朝を見るの思ひあり、而して李朝に入りては本邦の見るが如き平安、藤原、鎌倉等の変化なく、僅に朝鮮式の余喘を保つに過ぎず」¹¹⁷

つまり、かれは4世紀頃から10世紀頃にわたる三国・統一新羅時代は日本の3世紀頃から7世紀頃にわたる古墳・推古時代に、10世紀頃から12世紀頃の高麗時代は8世紀の奈良時代に該当するとした上で、朝鮮時代に至っては日本のような平安時代、藤原時代、鎌倉時代といった発展段階に入らなかったと主張したのである。かれの議論には方法論的にも資料の制約面からも大いに問題があると思うが、こうした美術認識の根底に「後進・停滞」の朝鮮文化観があることは明らかである。福田徳三が社会的・経済的側面から朝鮮社会は日本の藤原時代の段階に止まっていると唱えたことが、のちの日本人による朝鮮史研究の中でじわじわと広がる「停滞論」の始まりだとするならば¹¹⁸、八木の研究は福田より先立って文化的側面から朝鮮社会の停滞性を主張したことになる。

八木の「韓国の美術」論からみるもう一つの特徴は、朝鮮の遺跡・遺物に対して、つねに整理分類という方法に重点が置かれたことである。八木の整理分類は、まず韓国の美術品を規定することから始まる。彼は美術品に入るものとして大きく、甲) 陶器、乙) 鑄金、丙) 石刻の三つに分類したうえで、以下の(表2)のように、それぞれ該当するものを取り上げて説明した。

(表2) 八木による韓国美術品の分類(「韓国の美術」『国華』169号、1904年6月より)

韓国の美術品	甲) 陶器	甲) 歴史的分類	第一期 新羅焼	素焼
				祝部焼
			第二期 高麗焼	青高麗
			白高麗	無紋 有紋
		第三期 朝鮮焼	青絵手	
			素焼	
		乙) 技術的分類	素焼	赤焼
				青鼠焼
			釉焼	青釉無地焼
	同模様手焼			
	白釉焼			
	象眼入焼			
		青絵手焼		
	乙) 鑄金	仏像類		
		鏡鑑類		
		食器類		
		馬具類		
	丙) 石刻	仏塔類		
		石仏類		
碑石類				
石人類				
石獸類				

とくに陶器のうちには、「美術品の部類に入る可きは青磁、白磁、象眼入りの三種」¹¹⁹があると付け加えた。そのほか、韓国の仏塔に関しては、「第一、日本には(一)木塔(二)石塔(三)金属塔(四)土塔の四様あり、又支那には別に煉瓦塔あれ共韓地には石塔の一種に限る事。第二、日支両国の塔は製作複雑なれ共韓地の作品は単純なる事。第三、日支両国の塔は高大のものあれ共韓地の作品は比較的小なる事」¹²⁰であると、日本・中国との比較の視点から整理したうえで韓国には石塔の一種類しかないと叙述した。さらに韓国の城郭は「位置」によって異なるだけで、進歩及び発達はできなかったという結論を下すとともに、位置により i) 山城、ii) 半山城、iii) 平城、の三種に分けて分類し¹²¹、また現存する朝鮮の古代遺跡については撐石、高麗塚、後高麗の古墳、の三種に分類した¹²²。

実際、日本において整理分類という研究方法は様々な学問分野で展開されており、八木自身も日本の人類学的・考古学的調査においての経験を持っていた。その経験を韓国の美術品に応用したわけであるが、それによって韓国の美術が近代的な学問の対象としてはじめて「客体化」されるようになったのである。朝鮮の遺跡・遺物の「客体化」が朝鮮人自らの手によってではなく、他者(日本人)の手に委ねられた場合、さらに日本の帝国主義が大陸へと勢力

を伸ばしていく時期に、どういうイメージが表出されるのだろうか。そこに政治的意味合いはないとしても、少なくとも韓国の美術がもとの文脈から離れて日本美術の文脈のなかに包摂されたことは想像に難くない。ともかく、こうして朝鮮の遺跡・遺物は八木の整理分類により可視化され、日本の学界及び日本社会に登場した。言い換えるなら、近代的な学問の対象として不可視的だった朝鮮の遺跡・遺物が可視的なものに転じられたときに、はじめて朝鮮の美術は歴史の舞台に登場したということである¹²³。

5. むすびにかえて

1900年と1901年の八木奘三郎による人類学的・考古学的調査に続き、翌1902年7月には建築学的調査の目的で東京帝国大学から関野貞が韓国へ派遣された¹²⁴。関野の韓国調査は古建築を中心としてはいるが、次第に朝鮮の遺跡・遺物全般に広がることになる。両者の韓国調査は、今日の文化財にあたる遺跡・遺物がその中心になっており、近代「韓国」における文化財形成過程を窺がううえでその初発として位置づくべきことがらである。

今日の文化財がもつ普遍的な意味が、「わが国の国民的所産」¹²⁵にあるならば、それは紛れもなく「ナショナル・アイデンティティ」の形成とも深い関連性を持つ。さらに近代の産物であるナショナルリティーの創出過程が、その地域の歴史地理的要因に大きく規定されるとするならば、近代史上における文化財の持つ意味も国々の歴史地理的条件によって大きく変わってくるはずである。

近代「韓国」の場合は、近代国民国家として跳躍するまえに日本の植民地へと転落する歴史的経験を持つ。当然、近代「韓国」のナショナルリティーは近代日本（帝国）との相互関連のもとで成長せざるを得ない道をたどった。この間、文化財の調査・研究には朝鮮人の参加が一切許されず、専ら日本人の手によって行われた。したがって、植民地期における朝鮮の文化財は朝鮮人による「わが国の国民的所産」とはなれず、近代日本による「朝鮮」の「遺跡・遺物」としてしか存在できなかつたといえる。

1945年8月以前に、朝鮮半島で行われた遺跡・遺物調査はどのような歴史的経緯を持ち、またそこでは何が語られてきたのか。その全体像の追跡は、筆者の課題として残されているが、一先ず本稿においては、併合前の時期に「最初」の遺跡・遺物調査を行った東京帝国大学人類学教室の八木奘三郎を中心に考察した。まだ、日本帝国（そして、朝鮮総督府）の植民地政策の一環として朝鮮の遺跡・遺物研究が組み込まれていなかった時期に、かれによって可視化され、近代歴史の舞台に登場した「朝鮮文化財」はその歴史的意味付けとともに、その後、植民地期を通じてどのように「受容」或いは「変容」されていくのかは今後の課題として残っている。

- 1 1897年10月、朝鮮国の国号は大韓帝国(以下、韓国)と改称され、1910年8月29日まで正式国名として使われた。本稿においては地域をさす場合は朝鮮半島と表記し、国号をさす場合は大韓帝国成立以前を朝鮮、以後を韓国と表記する。
- 2 たとえば、1898年度における『人類学会雑誌』の掲載事項について、坪井正五郎は i) 人類学人種学総体に関する事及び纏まりたる人類学的研究の部、ii) 風俗習慣の部、iii) 言語の部、iv) 本邦古墳関係事項の部、v) 本邦石器時代関係事項の部、vi) 他の古物遺跡に関する事、に分類しており、人類学の範囲の中には考古学はもちろん、言語や風俗習慣等も含まれていたことが分かる(坪井正五郎「東京人類学会創立第十四年会演説」『東京人類学会雑誌』第152号、1898年11月)。まだ考古学は人類学の解明のための学問として組み込まれており、独立した学問領域として位置づけられていなかったといえる。
- 3 三上次男の発言:「朝鮮の考古学研究」『シンポジウム日本と朝鮮』勁草書房、1969年、P181。
- 4 藤田亮作「朝鮮古文化財の保存」『朝鮮学報』第1輯、1951年5月、P245。
- 5 これに関する先駆的な研究としては、황수영『일제기문화재피해자료(고고미술자료22집)』1973년(黄壽永『日帝期文化財被害資料(考古美術資料22集)』1973年)、이규열『한국문화재비화』한국미술출판사, 1973년(李龜烈『韓國文化財秘話』韓國美術出版社、1973年)が挙げられる。
- 6 목수현「일제하 박물관의 형성과 그 의미」서울대석사논문、2000년(睦秀玄『日帝下博物館の形成とその意味』ソウル大学修士論文、2000年); 최석영「조선총독부박물관의 식민지적 전시」『한국근대의 박물관·박물관』서경문화사、2001년(崔錫榮「朝鮮總督府博物館の植民地的展示」『韓國近代の博覧會と博物館』書景文化社、2001年)。
- 7 吳世卓「植民地朝鮮に対する日帝の文化財政策 - その制度的側面を中心にして」『考古学研究』452、1998年。
- 8 이순자『일제강점기 고적조사사업 연구』숙명여대박사논문、2007년(イスンジャ『日帝強占期古蹟調査事業研究』淑明女子大学博士論文、2007年)。
- 9 早乙女雅博「関野貞の朝鮮古蹟調査」『精神のエクスペディション』東京大学出版社、1997年; 山本雅和「文化表徴としての古墳 - 建築学者関野貞の古墳調査」『考古学史研究』9号、2001年; 高橋潔「朝鮮古蹟調査における小場恒吉」『考古学史研究』10号、2003年; 藤井恵介、早乙女雅博、角田真弓、西秋良宏 編『関野貞アジア踏査』(東京大学コレクション20)、2005年。
- 10 上記の(注5)、(注6)、(注7)、(注8)等の論文。
- 11 清野謙次「先進考古学者としての八木奘三郎氏」八木奘三郎著『改訂増補満州考古学』荻原星文館、1944年、pp623-624。
- 12 人類学教室の坪井正五郎は、八木の『日本考古学』に対して、「人類学的考古学の著述」であるとしている(坪井正五郎「東京人類学会創立第十三年会演説」『東京人類学会雑誌』第140号、1897年11月)。
- 13 1907年設立した韓国最初の博物館。
- 14 途中、1903年には台湾総督府学務局に1年足らずだが身をおいていた。
- 15 同上、清野「先進考古学者としての八木奘三郎氏」、pp676-677。
- 16 坪井九馬三「序文」八木奘三郎著『満州考古学』荻原星文館、1928年。
- 17 清野謙次「序文」同上『改訂増補満州考古学』。
- 18 小山富士夫「八木奘三郎先生の業績」『陶磁』第10巻第2号、1938年7月、p24。
- 19 齊藤忠「歴史上における八木奘三郎の業績・年表・著作目録」『大野延太郎・八木奘三郎・和田千吉集』(日本考古学選集4)、1976年、p102。
- 20 参加した中央委員は、坪井正五郎・山崎直方・阿部正功・佐藤傳蔵・三宅米吉の5人。
- 21 「東京人類学会記事」『東京人類学会雑誌』第112号、1895年7月、p417。
- 22 証明書の内容は以下の通りである(同上、「東京人類学会記事」、p418)。
 証明書 烏居龍蔵
 右ハ本会ノ会員ニシテ今般中央委員会ノ決議ヲ以テ遼東半島ニ於ケル現住民ノ風俗習慣有史前ノ古物遺跡等総テ人類学上ノ事実探検ノ為旅行ヲ囑託致候者ニ有之候以上證明ノ為本会ヲ代表シ茲ニ記名調印仕候也
 明治二十八年七月一日 東京人類学会幹事兼中央委員 坪井正五郎
- 23 「在旅順烏居龍蔵氏よりの來書」『東京人類学会雑誌』113号、1895年8月;「本会特派遼東半島探検者烏居龍蔵氏の書翰」『東京人類学会雑誌』114号、1895年9月
- 24 旗田巍「日本における朝鮮史研究の伝統」旗田巍 編『日本と朝鮮』勁草書房、1969年、pp6-8。
- 25 当時、人類学会を中心に展開された石器時代人種論の主な目的は、日本人の祖先(天孫族)を解明するところにあった。問題の発端は、モースやシーボルト等のお雇い外国人による日本の石器時代人種論から始まる。彼らは日本の貝塚発掘の調査結果をもとに、石器時代の日本列島に住んでいた民族として、北海道のアイヌ民族とアイヌの伝承に伝わるコロボックル民族を持ち出す。こうした問題提起は、やがて坪井正五郎の主張するコロボックル説

- と、白井光太郎・小金井良精の主張するアイヌ説がぶつかる論争として名を残すこととなる。いわゆる、アイヌ・コロボックル論争である。日本各地で発見された石器時代の土器や石器を使った民族が、アイヌなのか伝説に伝わるコロボックルなのか争点であるが、こうした考えの根底には、日本人の祖先が日本石器時代人を駆逐して今の日本民族を築いたという考え方が潜んでいる。当然、「固有日本人」の祖先の源流を中国や朝鮮から求める傾向も出てくるわけである（池田次郎「論集日本文化の起源5」『日本人種論解説』平凡社、1973年；木村充保「アイヌ・コロボックル論争に見る坪井人類学」『考古学史研究』第6号、1996年11月参照）。
- 26 鳥居龍蔵も、明治20年頃から「そもそも朝鮮に石器時代の遺跡ありや否や」が問題になっていたことを回顧している（鳥居龍蔵『ある老学徒の手記』朝日新聞社、1953年、p155）。
 - 27 「韓国に於ける人類調査」『東京人類学会雑誌』175号、1900年10月、p41。
 - 28 「八木奘三郎氏の帰朝」『東京人類学会雑誌』180号、1901年3月、p244。
 - 29 「八木奘三郎氏の韓国行」『東京人類学会雑誌』187号、1901年10月、p38。
 - 30 「八木奘三郎君の帰京」『考古界』1-7、1901年12月、p422。
 - 31 「理科大学鳥居龍蔵二人類学上取調ノ為メ台湾へ出張ヲ命ス」（『学術研究及学用品採集』『帝国大学十一年年報』；『東京大学年報』第四卷、東京大学出版会、1993年）、明治35年07月17日「東京帝国大学理科大学助手鳥居龍蔵人類学上取調ノ為メ清国へ出張ノ件」（『公文雑纂』明治35年）。
 - 32 八木奘三郎「韓国通信（坪井理科大学教授への來書）」『東京人類学会雑誌』177号、1900年2月、p94。
 - 33 西川宏「日本帝国主義下における朝鮮考古学の形成」『朝鮮史研究会論文集』7集、1970年。
 - 34 同上、八木「韓国通信（坪井理科大学教授への來書）」、p93。
 - 35 八木奘三郎「韓国通信（八木奘三郎氏より坪井正五郎氏への來信）」『東京人類学会雑誌』176号、1900年11月、p76。
 - 36 同上、八木「韓国通信（坪井理科大学教授への來書）」、p93。
 - 37 同上、「八木奘三郎氏の帰朝」、p244。
 - 38 同上、「韓国に於ける人類調査」、p41。
 - 39 八木奘三郎「韓国探検報告（其の1）-韓人の衣食住と冠婚葬祭」『東京人類学会雑誌』185号、1901年8月、p436。
 - 40 2回にわたる八木の踏査経路については、高正龍「八木奘三郎の韓国調査」（『考古学史研究』第6号、1996年11月）に詳しい。但し、高も八木の踏査経路を1925年頃の地図を使って復元しているが、かれの復元図には、1次調査の帰路について若干不明なところがあり、また、八木の調査した時期から20年以上も経った時点での地図を使用したため、本稿では1904年頃の地図を利用して復元した。1次調査の帰路以外に大部分は高によるものが多いが、本稿においては詳しい経路や調査地点を確認するというより、1次と2次調査に対する八木の調査経路の全体像のみを把握する。
 - 41 1回目の調査のとき、八木は「前便には元山に出づる様申上候が道路の悪敷と寒気の甚だしきとにより旧路へ帰る事と致し候」と報告している（八木奘三郎「韓国通信（八木奘三郎氏より坪井理科大学教授への通信）」『東京人類学会雑誌』178号、1901年1月、p163）。
 - 42 「八木奘三郎氏の韓国行」『考古界』1-5、1901年10月、p300。
 - 43 「八木蒔田両氏よりの韓国通信（坪井理科大学教授宛て）」『東京人類学会雑誌』188号、1901年11月、p67。
 - 44 『世界風俗写真帖』は1901年11月15日印刷、同19日発行となっている。その要目は「アイヌ、千島土人、琉球土人、台湾蕃人、韓国人、支那人、ルブン土人、マレイ土人、南洋諸島土人、オーストラリア土人」となっており、最初の広告当時とは少し変わって「人種」が主なメインになっていた。『世界風俗写真帖』の刊行目的について、坪井は「主として中等教育、および、これに準ずる諸学校に於いて、地理教授の参考に資するの目的を以て、日本を中心として「その附近なる清韓両国及び東南諸島」における「各人種の風俗を紹介するにある」と述べている（「総説」坪井正五郎編『世界風俗写真帖』1901年11月）。
 - 45 同上、「総説」坪井正五郎編『世界風俗写真帖』。
 - 46 『世界風俗写真帖』の韓国部には、韓国京城附近の風俗、韓人の服装（甲）、韓人の服装（乙）、韓国男子の衣服、韓国女子の衣服、韓国の建物、韓国日用器具の順に、図とともに解説が附されている。
 - 47 「人類学標本陳列所の増設」『東京人類学会雑誌』169号、1900年4月、p298。
 - 48 同上、八木「韓国通信（八木奘三郎氏より坪井正五郎氏への來信）」、pp76-77。
 - 49 同上、八木「韓国通信（坪井理科大学教授への來書）」、p93。
 - 50 時々石器時代物を採集して送ったとされているが、その他、殆どは現地で買求めたものであった（同上、八木「韓国通信（坪井理科大学教授への來書）」、p93）。
 - 51 八木奘三郎「韓国通信（八木奘三郎氏発、坪井理科大学教授宛て）」『東京人類学雑誌』179号、1901年2月、p205。
 - 52 同上、「八木奘三郎氏の帰朝」、p244。

- 53 八木奘三郎「韓国探検日記」『史学界』4-4、1902年4月、p61。
- 54 八木奘三郎「明治考古学史」『ドルメン』第4巻6号、1935年6月、p12。
- 55 人類学教室会員、小林与三郎は郵便局員として釜山に勤務しており、八木が釜山に着いてから離れるまで案内役を務めた。
- 56 同上、八木「韓国通信（八木奘三郎氏より坪井正五郎氏への来信）」、p76。
- 57 八木は1902年9月、正式に台湾総督府の囑託を受け、10月6日には東京を離れたが、台湾の生活に適應できず翌年9月には東京に戻り、12月に辞職した。
- 58 ドルメンのこと。当時は、「石塚」とも朝鮮語の「ゴヒンドル」とも呼ばれていた。
- 59 鳥居竜蔵「朝鮮金海貝塚の下部に発見せる石棺」『人類学雑誌』37-12、1922年12月；小田省吾「平南龍岡郡石泉山のドルメンに就いて」『朝鮮』114、1924年10月；榎本龟次郎「大邱に於けるドルメンの調査」『歴史公論』6-8、1927年6月；藤田亮作「大邱大鳳町支石墓調査」『昭和11年度古蹟調査報告』1927年7月。
- 60 同上、八木「韓国通信第（八木奘三郎氏より坪井正五郎氏への来信）」、p76。
- 61 同上、八木「韓国通信（坪井理科大学教授への來書）」、p93。
- 62 同上、八木「韓国探検日記」、p64。
- 63 開城の北に位置する山。
- 64 同上、清野「先進考古学者としての 八木奘三郎氏」、p642。
- 65 同上、八木「韓国短信（八木奘三郎氏より坪井理科大学教授への通信）」、p162。
- 66 同上、八木「韓国短信（八木奘三郎氏より坪井理科大学教授への通信）」、p163。
- 67 「八木氏よりの韓国通信」『東京人類学会雑誌』17-189、1901年12月、p126。
- 68 朝鮮半島の南の三道、つまり 慶尚道、全羅道、忠清道を指す。
- 69 同上、八木「韓国短信（八木奘三郎氏より坪井理科大学教授への通信）」、p162。
- 70 八木奘三郎「台湾に於ける考古学的観察」『考古界』3-9号、1904年2月、p489。
- 71 同上、清野「先進考古学者としての 八木奘三郎氏」、p643。
- 72 楽浪古墳調査は、朝鮮総督府がとくに力を注いだ古蹟調査事業であるが、その理由として、三上次男は「立派な遺物が出るからやりがいがある」ことと「朝鮮ばかりだけでなく、中国漢代の文化の性格を知るうえに役立つ」ということを挙げている（三上次男「朝鮮の考古学研究」『日本と朝鮮』勁草書房 1969年、p173）。
- 73 後ほど、歴史考古学という分野が開拓されるようになるが、八木が調査した当時は、まだ歴史考古学という概念はなかったようである。そのため、齊藤忠は八木を以て日本の「歴史考古学の先駆者」とも評価している。（齊藤忠「学史上における八木奘三郎の業績」『大野延太郎・八木奘三郎・和田千吉集』（日本考古学選集4）、1976年参照）
- 74 同上、清野「先進考古学者としての 八木奘三郎氏」、p640；日本考古学史上に残る「神籠石論争」で八木の名は知られている。1898年頃、『東京人類学会雑誌』に紹介された神籠石について、八木は「神籠石を以て神靈地の囲ひとする説は、主として高良山の築石に就て唱道されたのであるが、予の観察する所では此の地ほど又城郭に適した所はあるまい」と城郭説を主張したのに対し、神社を取り囲む聖域であると靈域説を主張した喜田貞吉との間で論争が起こった。現在は、八木の城郭説が正しいとされている（八木奘三郎「神籠石と城郭」『歴史地理』15-3、1910年3月；同上、齊藤「歴史上における八木奘三郎の業績」参照）。
- 75 同上、八木「韓国通信（坪井理科大学教授への來書）」、p91。
- 76 京城を囲む城壁の八門、即ち、東：興仁門、西：敦義門、南：崇禮門、北：肅清門、西南：昭義門、西北：彰義門、東北：恵化門、東南：光熙門を指す。また、八木は景福宮・昌徳宮・昌慶宮の三大宮闕の他に、慶運宮（明禮宮）、南別宮、永禧殿、景暮宮、儲慶宮、慶熙宮についても概説している。さらに八木は 朝鮮の古建築調査に関して、「本年（1901年）は工科大学の職員中に韓国調査有り」と云へば前記古建築に遺存するものは併せて研究せんことを望む」と付け加えた。翌年（1902年）東京帝国大学工科大学から関野貞が派遣され、韓国の古建築調査を行うようになるが、八木によれば、東京帝国大学工科大学における韓国の古建築調査計画はすでに1901年に立てられていることになる。まだ、関野貞は東京帝国大学へ赴任する前のことである。
- 77 柳成龍の『懲愆録』や『朝鮮開化史』を引用するほか、ときどき「韓史を按ずるに」「古書を按ずるに」という文面が見られる。
- 78 明治期、「愛好家の趣味」として朝鮮の陶磁器が日本の一般に広く知られるようになったのは、山吉盛義が出版した『古高麗痕』（畫報社、1900年9月）から始まる。外交官として朝鮮の公使館に勤めた山吉盛義は、自分が所蔵している朝鮮陶磁器の写真集を解説付きで出したのである。その序文には「皆之れを朝鮮の古陵残墳より掘出たるか若しくは幾多の桑溟山崩れ谷洗って自然に現出したる其物を拾得したるを以て（中略）就中石棺の内より発見したるものは多くは其形其質両から損所なく、釉料と云い花紋と云い依然として原象を存せり」と記している。こうした山吉の所蔵品は、やがて東京帝室博物館に展示されるようになる。その様子について、当時の記事には

- 「山吉盛義氏が韓国に蒐集せる高麗青磁等の出品は二百点余の多に及」び、「第一室は例の山吉盛義氏出品の朝鮮古陶器を以て充され」と伝えている（「東京帝室博物館の新陳列品」『考古界』1-9、1902年2月；「博物館の美術摸本陳列」『朝日新聞』1902年7月14日）。すでに朝鮮での陶磁器蒐集が行われていたことを物語っている。
- 79 小山富士夫「八木奘三郎先生の業績」『陶磁』10-2、東洋陶磁研究所編、1938年7月、pp24-25。
- 80 八木奘三郎「韓国探検日記（続）」『史学界』4-5、1902年5月、p67。
- 81 冬嶺（八木奘三郎）「日韓古史断に載せたる古器物評」『考古界』1-2、1901年7月、p106。
- 82 八木奘三郎「韓国仏塔論」『考古界』1-8、1902年1月、p455。
- 83 八木奘三郎「朝鮮京城内ニ存スル堅穴類似ノ小屋」『東京人類学会雑誌』107号、1895年2月；また岡倉由三郎は同年1月、『東京人類学雑誌』に「朝鮮の墳墓」と題する記事を載せ、朝鮮墳墓の形状について語っていた。
- 84 「考古学会記事」『東京人類学会雑誌』111号、1895年5月、p378。
- 85 坪井正五郎「東京人類学会創立第十一年会に於て為したる演説」『東京人類学会雑誌』115号、1895年10月、p3。
- 86 「東京人類学会遼東半島探検者鳥居龍蔵氏の書状」『東京人類学会雑誌』117号、1895年12月、p119。
- 87 同上、旗田「日本における朝鮮史研究の伝統」、pp6-7。
- 88 同上、冬嶺（八木）「日韓古史断に載せたる古器物評」、pp106-107。
- 89 同上、清野「先進考古学者としての八木奘三郎氏」、p640。
- 90 同上、八木「韓国探検日記」、p61。
- 91 同上、清野「先進考古学者としての八木奘三郎氏」、p641。
- 92 同上、旗田「日本における朝鮮史研究の伝統」、p5。
- 93 同上、八木「韓国探検報告（其の1）-韓人の衣食住と冠婚葬祭」、p448。
- 94 同上、八木「韓国通信（坪井理科大学教授への來書）」、p93。
- 95 八木奘三郎「韓国古代の陶器模様」『東京人類学会雑誌』185、1901年8月、p454。
- 96 同上、八木「韓国通信第（八木奘三郎氏より坪井正五郎氏への來信）」、p75。
- 97 同上、八木「韓国通信（坪井理科大学教授への來書）」、p92。
- 98 同上、八木「韓国短信（八木奘三郎氏より坪井理科大学教授への通信）」、p162。
- 99 同上、「八木蒔田両氏よりの韓国通信」、p64。
- 100 同上、旗田「日本における朝鮮史研究の伝統」、p14。
- 101 1902年の「韓国の美術」論に加筆を加えて掲載したのが、1904年以降の論考である。概ね重なるところが多い一方、内容においても具体的に付け加えている点から、本稿では、1904年6月の「韓国の美術」（『国華』）を中心に分析する。
- 102 日本における最初の美術史の本ともいえる『稿本日本帝国美術略史』（帝国博物館編、農商務省、1901年）も、歴史の時代順に沿って美術の変遷過程を語っている。八木が、この本に目を通したかどうかは不明であるが、同じ叙述方式で「韓国の美術」を論じたことに注目したい。
- 103 八木奘三郎「韓国の美術」『国華』1904年6月、p7。
- 104 同上、八木「韓国の美術」『国華』、p7。
- 105 同上、八木「韓国仏塔論」、p455。
- 106 現圓覺寺址十層石塔；国宝2号。
- 107 幣原坦「京城塔洞の古塔に関する諸記録に就いて」『韓国研究会談話録』韓国研究会、1903年9月、pp85-88。
- 108 八木奘三郎「韓国考古資料通信」『考古界』1-6、1901年11月、p343。
- 109 同上、八木「韓国考古資料通信」、p343。
- 110 同上、八木「韓国考古資料通信」、p343。
- 111 八木奘三郎「韓国の美術につきて」『時事新報』1902年1月1日付け。
- 112 同上、幣原「京城塔洞の古塔に関する諸記録に就いて」、p84。
- 113 関野貞「韓国京城廢大円覚寺石塔婆」『考古界』3-4、1903年9月。
- 114 浅見倫太郎「朝鮮仏法極盛時代の遺物（承前）」『朝鮮』4-3、1909年11月。
- 115 関野貞「朝鮮の石塔婆」『国華』267、271（1912年8月・11月）、277、278、280（1913年6月・7月・9月）。
- 116 八木奘三郎「韓国の美術」『考古界』4-2、1904年7月、p69。
- 117 同上、八木「韓国の美術」『考古界』、p80。
- 118 同上、旗田「日本における朝鮮史研究の伝統」、p14。
- 119 同上、八木「韓国の美術」『考古界』、p74。
- 120 同上、八木「韓国仏塔論」『考古界』、p456。
- 121 八木奘三郎「韓国京城論」『考古界』1-1、1901年6月、p31-32。
- 122 「八木奘三郎君の朝鮮考古談」『考古界』1-11、1902年4月、p672。
- 123 ところが、八木が規定した韓国の美術品のなかには、絵画や建築等の種類が含まれていない。それは、のちほど

朝鮮調査に着手する関野貞の他、日本人研究者らの手によって補われるようになる。

- 124 関野の派遣は東京帝国大学工科大学からの発意によるものであるが、八木の場合と違うところは、東京帝国大学から文部大臣を経由して内閣総理大臣（桂太郎）の承認を得たことにある（1902年6月24日「東京帝国大学工科大学助教授関野貞韓国へ被差遣ノ件」『公文書』内閣）。
- 125 少なくとも、現在の日韓両国の「文化財保護法」には、文化財の定義のなかで「わが国」と「国民的所産」という語が使われている。

※引用した資料が朝鮮語の場合は先に原文を掲載し、筆者が訳したものを加えた。

The study on the investigation of “Cultural Assets of Korea” by Japanese Imperium

Dong Won JUN

Doctoral Candidate, Tokyo University of Foreign Studies

The beginning of the 20th century, Japan has advanced to Korea in search of political and commercial interests. In the process, the institutions of Japan have embarked on the investigation of the Korean peninsula. Among them, in particular, the activities of the Tokyo Imperial University were noteworthy. This paper attempts to focus on the investigation of the “Cultural Assets of Korea” by Tokyo Imperial University in 1900 and 1901 when Korea was not incorporated into the control of the Japanese colonial power yet.

Yagi Sozaburo(八木英三郎, 1866-1942), a Tokyo Imperial University trained anthropologically archaeologically, was sent to Korea in 1900 by Tokyo Imperial University. At that time, in Japan Anthropology and Archaeology as an academic was not independent yet. In addition, in Korea there did not exist words, such as “kokuhō(国宝)” and “homotu(宝物)”.

Therefore, in this paper, I explore such issues as following questions: how Yagi was sent to Korea by Tokyo Imperial University: what was the purpose of investigation: how investigated “Cultural Assets of Korea” was recorded by him: and how it was visualized by the Japanese Imperium, also, how it began to be imaged within that historical context.